或る日の小せん

吉井勇

青空文庫

今は故人になつてしまつたが、私の知つてゐる落語家先代の柳家小せんは、足腰が立たず、目が見えなくなつてからも、釈台を前に置いて高座を勤め、昔からある落語にもいろいろ自分で工夫をして、「芸」に磨きをかけることを忘れなかつた。

久保田万太郎、岡村柿紅、私などが肝煎(きもいり)となつて、「小せん会」と云ふものを作り、毎月一回何処(どこ)かの寄席で独演会をやつてゐたが、幸ひにいつも大入だつたのは、要するに当人が芸に熱心だつたからなのであつた。

「五人廻し」「錦の袈裟」「子別れ」「とんちき」「高尾」「山崎屋」「突落し」「居残り佐平次」「磯の鮑」「お見立」「廓大学」「お茶汲」「羽織」「白銅」と云つたやうな廓話(くるわばなし)が得意で、かう云ふ落語になると足腰の立たない盲目の身でありながら、聴き手の心をぐんぐん引き付けてゆく、不思議な魅力を持つてゐるのだつた。芸の力と云つてしまへばそれまでだが、さうなるまでには一方(ひとかた)ならぬ苦心が重ねられてゐたのであつて、およそ世の中の「芸」と称せられるものには、何処か頭の下がるやうな底光りが感じられるのは、切磋琢磨と云つたやうな心の研(みが)きが、幾十度となくかかつてゐるからなのだらうか。

小せんも落語には、いろいろ苦心をしてゐたが——或る日のことである。

「小せんさんゐるかい。」

厩橋の直ぐ近くをちよつと曲つた、小せんの家の格子戸をがらりと開けて、声を懸けたのは岡村柿紅君。

「ああ、どうぞお上んなすつて下さい。」

障子の中からさう云つて返事をしたのは、まさしく小せんで。

「やあ、稽古か。」

上がると直ぐ茶の間で、瀬戸物の火鉢を中に、小せんと向ひ合つて坐つてゐるのは、近頃声色(こわいろ)で売り出した小山三。見ると私はさう云つて、柿紅君と一緒に奥の座敷の方へ通つた。

「ちよつと失礼します。」

と云つて、小せんが小山三に稽古をしてやつてゐるのは「高尾」の一節で、声色の冒頭として教へてやつてゐるらしい。

「ここまで話して置いて、それから声色にかかるんだ。いいかい。分つたかね。今度来るまでに幾度も自分でやつて見るがいいや」

と云つてから稽古を終つた小せんは、女房のお時に助けられながら、私達のゐる座敷の方へ居ざつて来た。

「如何も失礼を致しました。上野の師匠（三代目小さん）に頼まれて、若い輩五六人に稽古をしてやつてゐるもんですから、近頃はこれで中々忙しいんです。」

「さうかい。そりやあ結構じやないか。」

「ええ、お陰様で皆さんが心配して下さるもんですから、こんな体になつても、如何にかかうにかやつてゆけます。」

小せんはさう云つて、色の黒い面をちよつと伏せたが、暫くすると何か思ひ出したやうに顔を上げて、

「ねえ、岡村先生。あのう、白浪五人男の稲瀬川の勢揃ひの場で、それぞれツラネの台詞(せりふ)がありますね。あの中の忠信利平のは何とか云ひましたね。餓鬼の時から手癖が悪く——」

「抜け参りからぐれ出して。」

「ああ。さうさう、旅から旅を稼ぎ廻り。」

と云ふ小せんの言葉を継いで、柿紅君はすらすらと、

「碁打と云つて寺方や、物持百姓の家へ押し入り、盗んだ金の罪科（つみとが）は、毛抜けの塔の二重三重、重なる悪事に高飛なし――と云ふんだらう。」

と云つてから、

「何だい。何かにこれを使ふのかい。」

訊かれると小せんの顔には、盲目とは思はれないやうな朗らかに明るい微笑が浮んだ。

「ええ、実はこの次の小せん会で、居残り佐平次を演らうと思つていろいろ工夫をしてゐるんですが、終ひの方に女郎屋の主人が、すつかり佐平次を持て余して、ひと先づ金の算段に出て行つて呉れと云ふところがあるでせう。」

「ああ、あすこで。」

「こいつを使はうつて云ふんですよ。へえ、それがね、もし旦那え、と芝居がかつた台詞になつてから、こちらの閾を跨いで外へ出られないと云ふのは、実は旦那、人殺しこそしてゐませんが、夜盗、かつさり、家尻切、悪いに悪いと云ふことを仕尽しまして、五尺の体の置きどころのない身の上でございますと云ふと、主人は驚いて、そんな悪いことをしさうな方でもないやうな方だと云ひます。」

「うん、それから。」

「ええ、それからがこの台詞ですが、すつかり調子を砕いてしまつて、持つて生れた悪性で、餓鬼の時から手癖が悪うございまして、抜け参りからぐれ出しまして、旅から旅を稼ぎ廻り、碁打と云つては寺方だの、物持百姓の家へ押し入りまして、盗んだ金の罪科は毛抜けの塔の二重三重、重なる悪事に高飛なしと云ふと主人が、何だか聴いたやうな文句だと云ひます。如何でせう、ひとつ今度はかう云ふ風にやつて見ようと思つてゐるんですが。」

「なるほど。こいつあきつと受けるね。」

「面白いよ。」

と柿紅君と私とは口を揃へて云つたが、果して当日ここへ来ると、どつと客席が引くり返るほど受けた。

その晩楽屋で苦心した甲斐のあつたことを、ひどく喜んでゐた小せんの顔を、私はいまだに忘れることが出来ない。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆　別巻29　落語」作品社
1993（平成5）年7月25日第1刷
1999（平成11）年7月10日第4刷
底本の親本：「吉井勇全集　第七巻」番町書房
1964（昭和39）年3月
入力：門田裕志
校正：POKEPEEK2011
2014年7月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或る日の小せん

吉井勇

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/